

『種蒔く人』と民族名としての「カフカースのムスリム」
Ekinchi Newspaper and ‘Caucasian Muslims’ as a National Name

塩野崎 信也
Shinya SHIONOZAKI

Abstract The formation of the national consciousness of Azerbaijanis dates back to the 1870s when people who lived in the southeast part of the Caucasus (present-day Republic of Azerbaijan) started to call themselves ‘Caucasian Muslims’. It was the first uniting name which put them in a single group. ‘Azerbaijanis’, their current national name, was advocated in 1890 as a substitute for ‘Caucasian Muslims’, because including a religious name in the national name of the people was considered inappropriate. In this context, ‘Caucasian Muslims’ was thus the basis of the term ‘Azerbaijanis’.

The newspaper *Ekinchi* played an important role in popularizing the term ‘Caucasian Muslims’. It was the first newspaper written in a Turkic language in the Russian Empire and was published in Baku from 1875–1878. Hasan bey Zerdabi (1837–1907), the founder and editor of *Ekinchi*, and the writers of the newspaper often used the term ‘Caucasian Muslims’ and considered it as the national name. They especially used the term to distinguish themselves from Christian nations in the Caucasus, i.e. Armenians, Georgians, and Russians.

They thought of the Caucasus as their ‘homeland’, which is what the term ‘Caucasian Muslims’ was based on. For instance, Seyid Azim Shirvani (1835–1888), one of the most famous poets of that era and Zerdabi’s friend, wrote many poems wherein he expressed his loyalty to the Caucasus. This became common sense in the mid-nineteenth century, although they also thought of Iran as their homeland.

Another important reason why they used the word ‘Muslims’ in the national name is that they wanted to bridge the difference between the Sunni and Shiite sects. Although the majority of modern Azerbaijanis are Shiites, there were many Sunnis in Azerbaijan in the nineteenth century. Zerdabi and his friends repeatedly lamented the antagonism between the two sects. Therefore, they simply called their group as ‘Muslims’.

Keywords nationalism (民族主義), Azerbaijani (アゼルバイジャン人), Caucasus (コーカサス), Russian Empire (ロシア帝国), *Ekinchi* (『種蒔く人』)

はじめに

2016年4月2日、コーカサス（ロシア語では「カフカース」）地方に属するアゼルバイジャン共和国とアルメニア共和国との間で大規模な戦闘が発生、双方合わせて30名程度の

死者が出たと報じられた。かつてはともにソヴィエト連邦の構成共和国であった両国は、1991年の独立の時点で既に鋭い対立関係にあった。それぞれの国の主要民族であるアゼルバイジャン人とアルメニア人との間の確執が表面化し、暴力を伴う衝突へと発展したのは、ソ連時代末期のことである。1990年1月、アゼルバイジャンの首都バクー（Baki）でアルメニア人が虐殺された事件を発端に、両民族による報復合戦は次第に激化していき、やがてナゴルノ=カラバフ地方¹⁾をめぐる軍事的衝突へと至った。この「ナゴルノ=カラバフ紛争」の戦局はロシアの後ろ盾を得たアルメニア優勢で展開した。1994年の停戦合意以降、ナゴルノ=カラバフ地方は、名目的にはアゼルバイジャン共和国の領土であるが、「ナゴルノ=カラバフ共和国」を名乗り、事実上の独立状態にある。冒頭で触れた事件は、このような文脈で生じたものである。

両民族間の軋轢は、20世紀末に突然発生したものではない。両者の衝突の歴史は、少なくとも19世紀末にまで遡る。そして、その問題の根幹にあるのが、民族主義である。そもそも「アゼルバイジャン人」とは何か、「アルメニア人」とは何か、ということが分からなければ、両者の対立の要因を真に理解することはできないだろう。筆者は、前稿[塩野崎2015]において、アゼルバイジャン民族意識の形成過程について論じ、「アゼルバイジャン人とは何か」という問いに対する1つの回答を提示した。

さて、前稿では、「アゼルバイジャン人」という集団意識が19世紀末から20世紀初頭にかけて「創出」された、非常に新しいものであることが示された。そもそも、19世紀半ばに至るまで、現在のアゼルバイジャン共和国に該当する領域で暮らす人々は、自分たちが単一の集団であるという認識すら有していなかった。もちろん、彼らを一言で示しうるような集団名は、この時代には存在していない。このような状況の中、1870年代にバクーで発行されたテュルク語新聞『種蒔く人 *Əkinçi*』を中心に、「カフカースのムスリム」という集団名が普及していく。しかし、現地住民は、この呼称に少なからぬ不満を抱いていた。彼らは、宗教に基づく呼称は民族の名称としてふさわしくない、と考えていたのである。その結果、「カフカースのムスリム」に置き換える呼称として提唱されたのが、「アゼルバイジャン人」という民族名であった。その初出例は、ティフリスで発行されていた新聞『深鉢 *Kəşkül*（スーフィーが托鉢で用いる鉢を意味する）』の第115号（1890年11月16日付）に掲載された記事の中に見られる。

「カフカースのムスリム」は、現在のアゼルバイジャン共和国に該当する領域の住民を単一の集団として過不足なく表現しえた最初の言葉として、また「アゼルバイジャン人」の原型となった呼称として、非常に重要である。しかしながら、前稿においては、紙幅の関係も

1) ガラバーク地方 (Qarabag) のうち、シュシャ (Şuşa) 周辺の山岳地帯を指す地名。「ナゴルノ=カラバフ (Nagorno-Karabakh)」という呼称は、ロシア語で「山岳ガラバークの」を意味する形容詞 *Нагорно-Карабахский* に由来する。アゼルバイジャン語では、やはり「山岳ガラバーク」を意味する *Dağlıq Qarabağ* と呼ばれる。それぞれの位置に関しては、図1を参照。



※Академия Наук Азербайджанской ССР, Атлас Азербайджанской советской социалистической республики, Баку, 1963などを参考に筆者が作成した

※下線付きの地名は「地域」、枠入りの地名はより大きな地理区分である「地方」、点線は現在の国境線を示す

※①～⑤は、現ロシア連邦 ①カバルダ・バルカル共和国、②北オセチア・アラニア共和国、③イングーシ共和国、④チェチェン共和国、⑤ダゲスタン共和国

図1 南東コーカサスとその周辺

あり、この件に関して詳細な分析を行うことができなかった。そこで本稿では、『種蒔く人』誌と、この新聞に関わった幾人かの人物の思想の分析を通じて、「カフカースのムスリム」とはどのような集団意識であったのかを探る。行論の都合上、前稿の内容と一部重複する箇

所が存在することをご了承いただきたい。

なお、本稿の主要史料の1つである『種蒔く人』誌は、同時代のオスマン帝国や後年の南東コーカサスにおける定期刊行物の多くと同様、「○年目第△号」といった巻号表記を用いている。本稿ではこれを「第○巻第△号」と読み替えて表記する。日付は、帝政ロシアで用いられていたユリウス暦に準拠する。また、本稿では、現在のアゼルバイジャン共和国の領域（北アゼルバイジャン）を「南東コーカサス」と表記する。イラン領アゼルバイジャン（南アゼルバイジャン）を指す際には、ペルシア語の表記に基づく「アーザルバーイジャー」の語を用いる。現在「アゼルバイジャン語」と呼称されている言語も、「テュルク語」とする。

I 『種蒔く人』とその周辺

1 ハサン・ベイ・ゼルダービー

まずは、『種蒔く人』の創設者であり、編集長・主筆も務めたハサン・ベイ・ゼルダービー (Həsən bəy Zərdabi, 1837-1907)²⁾を紹介しよう。19世紀後半の南東コーカサスを代表する知識人の1人である彼は、ジャーナリスト、啓蒙運動家、教育者、福祉団体の創設者など、多方面の活動を行ったことで知られる。また、彼はアゼルバイジャン演劇史において重要な役割を果たした人物でもある。

ゼルダービーは、南東コーカサスの中部に位置するゴランボイ郡 (Goranboy) ゼルダーブ村の名士の家系に生まれた。生年に関しては、かつて1842年とされていたが、彼の妻の回想録にある記述から1837年が正しいと言う [Aşırılı 2009: 23; cf. Zərdabi: 73]。

さて、1813年のゴレスタン条約によってガージャール朝イランからロシア帝国へと割譲されて以降、南東コーカサスでは、制度や社会、文化のロシア化が徐々に進行していった。教育も、その例外ではない。その一環として1830年前後、バクー、シャマフ (Şamaxı), シェキ (Şəki), ギャンジャ (Gəncə)³⁾, ナフチヴァン (Naxçıvan) といった都市に、ロシア式の教育を行う初等学校が設立されている。これらの学校は官吏の養成を第1の目的としており、ロシア語の他、現地語や地理学などが教えられたと言う [Məmmədov 2006: 297-298]。ゼルダービーが受けたのは、そういった新時代の教育であった。彼はシャマフのロシア式学校で初等教育を終えた後、ティフリス (Тифлис。現在のジョージアの首都トビリシ) のギムナジヤ⁴⁾を経て、1861年にモスクワ大学に入学、理数学部で学んでいる。

1865年に大学を卒業したゼルダービーは、ティフリスの境界線局 (межевая палата)

2) ロシア語では、メリコフ (Гасан-бек Меликов) と呼ばれることも多い。他に、メリクザデー (Məlikzadə), ゼルダーブル (Zərdablı) などと呼ばれることもある。

3) 当時の公称は「エリザヴェトポリ (Елизаветполь)」。

4) 7~8年制の男子中等学校 [川端ほか(監修): 177]。

に入局、土地関係の職務に従事した後に、グバ（Quba）の裁判所の書記となった。1869年には、石油産業の発展による急成長⁵⁾の過程にあったバクーに移り、当地のギムナジヤで自然史と数学を教え始めた。また、1872年には貧しい生徒を支援する組織を設立している。

バクー・ギムナジヤ時代のゼルダービーの生徒の中には、ネジェフ・ベイ・ヴェズィーロフ（Nəcəf bəy Vəzirov, 1854-1926）、エスゲル・アーガー・ゴラーニー（Əsgər ağa Gorani, 1857-1910）らがいる。1873年には、彼らを動員して、ミールザー・フェテリー・アーフンドザーデ（Mirzə Fətəli Axundzadə, 1812-1878）による戯曲『けちな男の生涯 *Sərgüzəşti-mərdi-xəsis*』⁶⁾を上演した。これは南東コーカサスの地における、演劇の最初の上演記録である。

これらの活動に従事する一方、ゼルダービーはテュルク語新聞の発行を志すようになっていく。最初にその着想に至ったのは、1868年のことであったと言う。1865年に制定された検閲臨時規則によって出版物の検閲が大幅に緩和され、ロシア帝国全土に改革的な雰囲気広まりつつあったとはいえ、これは困難な事業であったようだ [cf. 高田 2012: 319-320]。それでも、エブデュッラー・アーガー・バキュハノフ（Əbdülla ağa Bakıxanov, 1824-1878）⁷⁾の支援を受けるなどし、ゼルダービーは1875年に出版許可を獲得、同年7月22日付で『種蒔く人』誌の創刊号を発行した。ロシア帝国領内で初めてのテュルク語新聞である。ゼルダービーは編集長を務める傍ら、主筆として1200本を超える記事を書いた。

『種蒔く人』は、第3巻第20号（1877年9月29日付）をもって廃刊となるまでの間に、隔週刊で計56号が発行された。およそ2年というその刊行期間の短さにもかかわらず、『種蒔く人』は南東コーカサスにおける後の時代のテュルク語出版に非常に大きな影響を与えた。後年のテュルク系知識人・出版人たちは、『種蒔く人』を最初のテュルク語の新聞として言及し、自らの範としている [e.g. APA: 74]。この雑誌と同じ名を名乗る定期刊行物も、いくつか現れた。ロシア革命を受けて結成された左翼組織によって1918年に刊行された週刊誌は、特によく知られる。他に、1921年から1924年にかけて発行された月刊誌、1926年の1号限りの刊行物も『種蒔く人』を名乗っている [İSTİİ: 81-82]。

1879年、ゼルダービーは、家族とともに故郷のゼルダーブ村に帰る。その地で16年を過

5) 18世紀後半から19世紀初頭の時点では4000~5000人程度であったバクー市の人口は、1854~1857年に8374人、1874年に1万4577人、1897年に11万1904人と急増している [Абдуллаев 1965: 127; Quliyeva 2011: 9; Мильман 1966: 205]。

6) アーフンドザーデは、現代アゼルバイジャン文語の確立者として知られる思想家、啓蒙活動家、劇作家。彼は、現在のアゼルバイジャン共和国において、民族覚醒の礎を築いた人物としても非常に重要視されている。その生涯と思想に関しては、例えば [Məmmədov 2006: 314-319] を参照。また、『けちな男の生涯』は、アーフンドザーデが1852年に発表したテュルク語による戯曲。『ハージュ・ガラ *Haçı Qara*』という別題でも知られる。後に作者本人の手によるロシア語訳が、ティフリスで発行されていたロシア語新聞『カフカース *Кавказ*』誌に掲載された。

7) 19世紀前半の南東コーカサスを代表する知識人であるアッバースグル・アーガー・バキュハノフ (Abbasqulu ağa Bakıxanov, 1794-1847) の異母弟にあたる [cf. 塩野崎 2010]。

ごした後、1896年に再びバクーに戻り、ロシア語新聞『カスピ *Kaspiy*』の編集者となった。1897年からは、バクー市における教育関係の公職にも就いている。『カスピ』誌の編集の傍ら、テュルク語新聞である『暮らし *Həyat*』にも多くの記事を寄稿した。1907年、バクーで死去している [Əkinçi: 5-22; Şahverdiyev 2006: 8-19; Aşırhı 2009: 20-44; Mahmudov 2005 (red.): 331-332]。

2 種蒔きの担い手たち

『種蒔く人』の誌面は、いくつかの欄から構成されていた。カフカース地方の事情を論ずる「地方 (*daxiliyyə*)」欄、農業や農村生活に関する情報を扱う「栽培・農耕ニュース (*əkin və ziraət xəbərləri*)」欄 (後に「農民の活動 (*əf'ali-əhli-dehat*)」欄に改称)、西洋の諸科学を紹介する「学問ニュース (*elm xəbərləri*)」欄、読者の投稿記事を掲載する「通信 (*məktubat*)」欄、そして世界各国の出来事を伝える「最新ニュース (*təzə xəbərlər*)」欄である。これに編集部からの「告知 (*e'lan*)」が付されることもある。興味深いのは、やはり「栽培・農耕ニュース」欄の存在であろう。『種蒔く人』は、その誌名に違わず、当時の一般大衆の大半を占めていた農民たちを想定読者とする新聞であった。

「通信」欄には、様々な著作家たちが記事を寄せていた (表1)。多くが署名記事である。その中には、マハチカラ (*Махачкала*。現在のロシア連邦ダゲスタン共和国の首都) 在住のエレクベル・ヘイデリー (*Ələkbər Heydəri*) (No. 2)、駐カルス (*Kars*) 領事の翻訳官であったハチャトゥール・ゴルフマゾフ (*Xaçatur Qorxmazov*) (No. 6)、当時のシェイヒュルイスラーム (*шейх-уль-ислам*)⁸⁾であったアーフント・エフメト・ヒュセインザーデ (*Axund Əhməd Hüseynzadə*, 任 1862-1884) (No. 14) といった名も見られる [cf. Məmmədli 2005: 86-95]。バクー・ギムナジヤの卒業生で、かつてのゼルダービーの生徒であったヴェズイーロフやゴラーニーは、留学先のモスクワから多くの記事を寄せた (No. 3, 4)。

『種蒔く人』の寄稿者として特によく知られるのが、前節でも名前を挙げたアーフント・エフメト・ヒュセインザーデである。彼は「イスラーム民族の仮名の無名代表 (*Milləti-islamın təqdirən Vəkili-namə'lumu*)」という筆名を用いて、2本の論説を投稿している (No. 9)。また、ゼルダービー自身も、「7 200 4 1 2 10」なる筆名を用いて「投稿」したことがある (No. 18)。なお、この奇妙な筆名は、それぞれの数字に対応する数値を持つアラビア文字をあてていくと、*Zərdābi* という綴りが浮かび上がる、というものである。

8) 帝政ロシアによって1823年に設置された職位で、南コーカサス地方のシーア派住民の宗教生活や、イスラーム法に関連する業務を統括するものとされた [Məmmədli 2005: 17, 31-32]。

表1 『種蒔く人』の寄稿者（署名のあるもの）

No.	寄稿者名	回数	掲載号
1	Əhsən ül-Qəvaid	18	1-12, 2-1~2-12, 2-22, 2-23, 3-1, 3-6, 3-7
2	Heydəri	14	1-3, 1-6, 1-10, 1-11 (2), 2-1, 2-4 (2), 2-5, 2-6, 2-9, 2-10, 3-6, 3-13?
3	Əsgər Adıgözəlzadə Gorani	5 (10)	1-8, *2-1, *2-7, 2-24, *3-1, 3-3, *3-8, 3-9, *3-9, 3-11
4	Nəcəf Vəzirzadə	5 (6)	2-18, 2-21, 2-24, *3-6, 3-8, 3-10
5	Məhbus Dərbəndi	5	2-10, 3-4, 3-5, 3-8, 3-13
6	Xaçatur Qorxmazov	2	1-10, 2-13
7	Sultanov	2	2-2, 3-3
8	Əlimədəd Abdullazadə	2	2-6, 2-7
9	Milləti-islamın təqdirən Vəkili-namə'lumu	2	3-2, 3-5
10	Məhəmmədətağı Əlizadə Şirvani,	2	3-3, 3-4
11	Mirzə Həsən əl-Qədari	1	1-8
12	Məhəmmədəli bəy Vəliyev	1	1-9
13	(Badkubəli molla)	1	1-11
14	axund Əhməd Hüseynzadə	1	1-12
15	Ələkbər Elçizadə	1	2-3
16	Şüərayi-ərbəeyi-Şirvan	1	2-8
17	Məmnun əl-Qədari	1	2-11
18	7 200 4 1 2 10	1	2-14
19	Xeyirxahi-İran	1	2-16
20	Məhəmmədəli Səlyani	1	3-5
21	Möhsün Badkubeyi	1	3-14
22	(Harayçı qardaş)	1	3-18
23	Hadiy ül-Müzillin Qarabaği	(1)	*3-12

※「掲載号」欄で*付きのものは、「通信」欄以外の署名記事

※また、「回数」欄の（ ）内の数字は、「通信」欄以外の署名記事を含めた記事数

※掲載号で1-11(2)などであるものは、同一号に2つの記事が掲載されているもの

3 セイト・エズィーム・シルヴァーニー

「通信」欄に署名記事が掲載された人々以外で『種蒔く人』と深い関わりを持つ人物としては、セイト・エズィーム・シルヴァーニー (Səyid Əzim Şirvani, 1835-1888) が挙げられる。19世紀の南東コーカサスを代表する詩人である彼は、『種蒔く人』に寄せた10篇以上の詩や個人的に交わされた書簡を通じて、ゼルダービーと思想的な影響を相互に与えあったと言われる [Aşırılı 2009: 35-36]。

シルヴァーニーは、1835年にシャマフ市で生まれた。9歳の頃に父を亡くした彼は、母親に連れられてダゲスタン中西部のアクサイ村 (Акса́й) に移住する。その地で彼は、母方の祖父の庇護のもと、イスラーム神学やアラビア語、ペルシア語などの教育を受けた。1853年には故郷のシャマフに帰り、翌年に結婚、後に一男二女をもうけている。1855年にはイラクへと出発、バグダードでの遊学を開始した。その後も、ダマスカス、メッカ、メディナ、カイロと、各地を転々としながら、イスラーム諸学の勉学に励んだ。

1869年、シルヴァーニーは再びシャマフに戻り、私塾を開いた。この塾では、伝統的なイスラーム諸学に加え、歴史や地理、算術なども教えたと言う。そのため、彼は周囲から不信心者とみなされ、批判を受けることもあったらしい。なお、この塾で学んだ者の1人に、後に風刺詩人として有名になるミールザー・エレクベル・サービル (Mirzə Ələkbər Sabir, 1862-1911) がいる。

その後も紆余曲折を経つつ、シルヴァーニーはシャマフ市で教育活動に従事し続け、主にアラビア語、ペルシア語、テュルク語、イスラーム法を教えた。その傍ら、テュルク語やペルシア語で多くの詩を詠んでいる。作品の数は、テュルク語の詩だけで1172点にのぼると言う。彼は1888年5月20日、シャマフで死去した [Şirvani 1: I. 4-32; Şirvani 2: 3-7]。

II 帰属意識としての「ムスリム」と「カフカース」

I 民族としての「ムスリム」

『種蒔く人』が「農民」、すなわち一般大衆を対象とした新聞であったことは、前章で記した通りである。しかし、これは完全に正確な表現とは言えない。ゼルダービーが『種蒔く人』の読者として真に想定していたのは、「ムスリム」の大衆である。例えば、創刊号の冒頭に書かれたゼルダービー自身の筆による文章には、以下のようにある。

我々は、こういった [=科学知識や最新のニュースに関する] テーマを扱う新聞がムスリム (müsəlmanlar) のために必要であることに気付き、それに伴う艱難辛苦を甘受して、[この出版事業を] 開始する。ムスリムのうちの知性派や先駆けた人々には、民衆 (xalq) がこの新聞を講読することを妨げぬよう、むしろ読者数の増加に尽力していただくよう、我々はお願ひする。[Əkinçi: 24]

ゼルダービーら『種蒔く人』執筆陣が、自身が属する集団を指す際に用いた呼称は、「ムスリム (müsəlman)」であった。この「ムスリム」とは、どのような言葉であろうか。もちろん「ムスリム」は広くイスラーム教徒一般を意味する言葉である。しかし、『種蒔く人』に登場する「ムスリム」は、より限定された、ある特定の範囲の人々を指す言葉として用いられていることが多い。

まず、『種蒔く人』に現れる「ムスリム」は、「ミレット (millət)」⁹⁾であるとされる。より明確に「ムスリムのミレット (müsəlman milləti)」という表現が用いられることもある [e. g. Əkinçi: 114, 170]。また、「ムスリム」は「ターイファ (tayfa)」とする記事もある [e.

9) この言葉からまず思い起こされるのは、オスマン帝国が非ムスリム臣民を宗教・宗派ごとのミレットに分割し、総主教や大ラビといった宗派共同体の長に自治権を付与した「ミレット制」の事例であろう。オスマン帝国においても、この前近代的な「ミレット」の語が、近代以降に「ネイション」の訳語として用いられるようになっていった。なお、ミレット制の概略とその研究史に関しては、上野氏の論考で簡潔にまとめられており、参考になる [上野 2010]。

g. Əkinçi: 157, 306]。多くの場合、「ミレット」と「ターイファ」は、同義語として用いられているようである。例えば、第2巻第22号（1876年11月20日付）の記事には以下のようにある。

今や、ムスリムのターイファ（müsəlman tayfası）は、他の諸ターイファの間における、ぶち入りのカラス（nöqtəli qarğa）¹⁰⁾となった。〔中略〕地上に暮らす人類は、1つの家族のようなものである。ある家族において、1人の人物が働かず、他の者が稼いだパンを食べていたならば、家族の誰もが彼と仲良くしようとはせず、この人物にも働かせようとするであろう。ムスリムのミレットは、他の諸ミレットの間における、この人物のごときものなのである。〔Əkinçi: 297〕

ここでは「ムスリムのミレット」と「ムスリムのターイファ」が交換可能な語として用いられており、そういった例は他の記事にも見られる [e. g. Əkinçi: 331, 340, 363]。そして、「ミレット」と「ターイファ」は、ともに「民族（ネイション）」の意味で用いられていると考えられる。例えば、第2巻第23号（1876年12月6日付）に掲載された記事には、以下のようにある。

我らムスリムのターイファ（bizim müsəlman tayfası）がイギリスのターイファ（inglis tayfası）よりどれほど後進的であるかは、『種蒔く人』誌と、ロンドン市で発行されている『タイムズ』誌を見〔比べ〕れば分かるだろう。〔Əkinçi: 305〕

この記事では、「ムスリム」が「イギリスのターイファ」、すなわちイギリス人に対置される概念として登場している。さらに第3巻第8号（1877年11月4日付）には、以下のようにある。

バードクーベ [= バクー] 県の住民はおよそ10万人に達するが、アルメニア人（erməni）は1万人もいない。ロシア人（rus）は、それよりさらに少ない。我らの県には唯一、バードクーベ・ギムナジヤがあるが、その生徒500人のうち250人がロシア人、150人がアルメニア人、100人がムスリム（müsəlman）である。〔中略〕

そして、我々の学校で勉強しているのは、ロシア人、アルメニア人といった民族（millət）である。我らムスリム（biz müsəlmanlar）は、コレラの災厄から逃げるがごとくに学問から逃げ、政府の奨学金（padşahlıq xərci）¹¹⁾によってですら、学ぼうとしない。〔Əkinçi: 82〕

ここでは、「ムスリム」がロシア人やアルメニア人といった民族に対置される概念として登場している。『種蒔く人』には、これ以外にも、「ムスリム」がアルメニア人やロシア人、あるいはグルジア人に対置される呼称とされている記事がいくつか存在する [e. g. Əkinçi: 134, 197-198]。また同様の例は、シルヴァーニーによるロシア皇帝を讃えて詠まれた以下

10) 「のけもの」、「はぐれもの」程度の意味と推測される。

11) 直訳すると「皇帝による支出」。ロシア政府による奨学金、助成金の類を指していると思われる。

の詩にも見られる。

彼はどの民族 (millət) にも情けをかけるし、区別することもない

ユダヤ人も、アルメニア人も、グルジア人も、ロシア人も、ムスリムも [Şirvani 1: II. 190]

このように、多くの用例において「ムスリム」と対置されているのは、コーカサス地方に居住するキリスト教徒の諸民族である。このことが示唆するのは、「ムスリム」がコーカサスやその周辺で暮らすイスラーム教徒を指して用いられていたこと、そして「民族」の呼称と認識されていたことである。第1巻第11号(1875年12月18日付)に掲載された記事で、「我らムスリム」と「オスマン朝とイランの住民 (Osmanlı və İran əhli)」が対比されていることから、それが窺える [Əkinçi: 106]。少なくとも、ゼルダービーやシルヴァーニーといった『種蒔く人』周辺の人々は、「ムスリム」を上で述べたような意味で用いていた。

このように『種蒔く人』に見られる「ムスリム」は、コーカサス地方のイスラーム教徒を指していると考えられるわけだが、実際、一部の記事では、より明確に「カフカースのムスリム」という言葉が用いられている。例えば、第3巻第6号(1877年3月17日付)に、以下の様にある。

ロシアの政府が我らの地方を占領する以前、我らカフカースのムスリム (bizim Qafqaz müsəlmanları) は、その蒙昧さ故に、この世に貴族より幸福なものはいないと思い、政府が彼らの学問修得のために建てた学校に、ただこの目的のためだけに入ったのだった。すなわち、勉強して貴族になろうと。威張り散らす特権を得ようと。[Əkinçi: 367]

この「カフカースのムスリム」という集団名は、『種蒔く人』が刊行された1870年代半ばには、既にある程度普及した表現であったようだ。同誌においては、ゼルダービーら編集側の人々だけでなく、デルベンディー(表1: No.5)ら一部の寄稿者もこの語を用いている [e. g. Əkinçi: 52, 361-362]。

『種蒔く人』に現れる「ムスリム」は、その大半が「カフカースのムスリム」の省略形であると理解できる。それをよく示す例として、第3巻第2号(1877年1月18日付)に掲載された、「イスラーム民族の仮想の無名代表」とゼルダービーのやりとりを一部紹介しよう。なお、先述の通り、「イスラーム民族の仮想の無名代表」とは、アーフンドザーデの筆名である。まず、アーフンドザーデが次のように主張する。

学問 (elm) を修めるためには、能力 (istitaət) と連帯 (ittifaq) と手段 (vəsilə) とが必要である。まず、我々は能力を有しておらず、その原因を明らかにする度胸もない。我々は、連帯も有していない。カフカースの領域 (Qafqaz səfəsi) に居住しているムスリム (müsəlmanlar) の半分はシーア派で、[残り] 半分はスンナ派である。シーア派の者はスンナ派の者を嫌い、スンナ派はシーア派を嫌っている。互いの言葉に耳を傾ける者はいない。[このような有様で] 連帯が、どこから生じようか。[Əkinçi: 334]

このように「カフカースの領域に居住するムスリム」の状況を嘆くアーフンドザーデに対して、ゼルダービーは以下のような楽観的な回答を行う。

おお、我が友、イスラーム民族の仮想の無名代表よ（通信欄に印刷された手紙への回答）。〔中略〕実際、無学（elmsiz）のままに留まる民族が時の経過とともに空虚になることは明瞭明白である。学問を修得するために能力、連帯、手段が必要であり、それらのうちのどれも我らムスリムの集団が持っておらず、〔今後も〕持ちえないのならば、このように主張するあなたの手紙は一部の学問をおさめた人々の言葉を確認するものとなる。すなわち、彼らは言うのだ、我らムスリム民族は、未来においてはさらに役立たずとなろう、と……。あなたの手紙を注意深く読んだ者の多くが影響されかねないので、この冒頭部の私の回答において、ことは実際にはそのようではないと主張する。我らムスリムが学問を修得することは、あなたがおっしゃるがごとき困難なことではない。
[Əkinçi, 331]

このように、アーフンドザーデが「カフカースの領域に居住するムスリム」と呼んでいる集団を、ゼルダービーは単に「我らムスリム」、「我らムスリム民族」と呼んでいるのである。また、アーフンドザーデの論説から窺えるように、この「ムスリム」という呼称には、スンナ派とシーア派という宗派の違いを超えるという意図もあったようだ。

現在のアゼルバイジャン共和国では、国民の大多数がシーア派のイスラーム教徒となっているが、19世紀の時点では相当数のスンナ派住民が残っていた。先行研究によると、南東コーカサスにおけるシーア派住民の割合は、1860年代には既に60%を超えていたようだ〔Фурман (ред.) 2001: 302〕。ただ、先述のアーフンドザーデの論説に見るように、人々の実感としては「半数はスンナ派」であり、両者はお互いに反目しあっていたようだ。また、シーア派住民はシェイヒュルイスラームの、スンナ派住民はムフティー（муфтий）の管轄下に置かれるなど、両宗派の住民の間には行政上の区分も存在した。

この宗派間の対立はこの時代の知識人たちにおける共通の嘆きの種であったようで、シルヴァーニーも、以下のように詠んでいる。

我々のうちのシーア派は、スンナ派を中傷する
我々のうちのスンニ派は、シーア派の陰口を叩く
シーア派、スンナ派という言葉は、我らを空虚にした
イスラームの人々（əhli-islam）の目を盲にした [Şirvani 1: II. 118]

このように、ゼルダービーやシルヴァーニーは、「我々」とはシーア派住民だけでもスンナ派住民だけでなく、イスラーム教徒全体、あるいは「ムスリム」であると主張するのである。また、シルヴァーニーは以下のような詩も詠んでいる。

我々はロシアの王に服従しているとはいえ
誇りには1つの傷も付けられなかった
我々が奪われたものはたくさんあるが

残念、我らの名はムスリム (müselman) なのだ [Şirvani 1: II. 126]
 自分たちの集団の名を高らかに宣言するこの詩からは、「ムスリム」に対するシルヴァーニーの帰属意識をはっきりと見て取ることができる。

2 「ふるさと」としての「カフカース」

前稿でも述べたように、ロシアからもたらされた新しい地理概念である「カフカース」は、19世紀後半の南東コーカサスにおいても、少なくとも知識人の間では一般的な地理認識となっていた。そして、この「カフカース」が、彼らの「ふるさと」の呼称として定着していたことは、『種蒔く人』に「我らのカフカース（地方）(bizim Qafqaz (vilayəti))」という表現が数多く現れることから窺えるのである [塩野崎 2015: 45]。

では、ここで、この時代における南東コーカサスの人々の地理認識をより詳しく検証しよう。分析に用いるのは、『種蒔く人』の記事ではなく、シルヴァーニーの作品である。「ふるさと」を題材にした詩を多く詠んでいることが、彼の作品を取り上げる理由である。

シルヴァーニーの詩を読んでまず気が付くのは、生まれ故郷であるシャマフ市、あるいはシルヴァーン地方¹²⁾に対する熱烈な愛情である。彼は、「シルヴァーンの王国 (mülki-Şirvan)」や「シルヴァーンの領域 (sahəti-Şirvan)」,あるいは「シルヴァーンの町 (şəhri-Şirvan)」を「天国のような (cənnət-asa)」などと形容し、「薔薇園 (gülüstan)」や「高貴なる天空 (fələki-məcd)」などと喩える [Şirvani 1: II. 14, 145, 250, 300]。また、その住民も、「シルヴァーンの完璧なる人々 (əhli-kəməli-Şirvan)」などと賞賛されている [Şirvani 1: II. 32]。

シルヴァーニーの帰属意識、「ふるさと」の感覚の中心にあるのは、「シルヴァーン」であった。そして、彼は、このシルヴァーンを「イラン」の一部とみなしていた。例えば、シルヴァーンを「イランという花園の薔薇 (güli-gülşəni-İran)」と喩える詩がある [Şirvani 1: II. 39]。

このようにシルヴァーン地方はイランに属するとみなされているのだが、同時に、この地方は「カフカース」にも属すと考えられていたようだ。その例として、以下の2つの詩の一部を紹介しよう。

シルヴァーンの町は、カフカースのあらゆる国の頂点であった [Şirvani 1: II. 102]

こんにちは、おお、カフカースの人々よ (əhaliyi-Qafqaz)

おお、誉れの持ち主たる長たちよ

こんにちは、おお、善なるしるしの集団よ

その民族の誇り (millətin qeyrəti) を持つ者たちよ [Şirvani 1: II. 117]

12) シルヴァーンは、南東コーカサスの東部を指す歴史的な地方名。また、その中心都市であったシャマフ市の別称として用いられることもある。

そして、もちろん、カフカースはロシアに属するものであった。シルヴァーニーは、ロシアに対する帰属意識、所属意識も有していたと言える。ロシアに対する彼の忠誠は、例えば「ロシアの敵よ、敗北すべし」という一節によく表れている [Şirvani 1: II. 127]。前節で引用したロシア皇帝を讃える詩からも、それは窺える。また、ゼルダービーに宛てた韻文の手紙でも、以下のようにロシアの恩恵が語られている。

その時からである、ロシアの国の王が

カフカースの王国を保護し

〔中略〕

イスラームの人々は完全に進歩した

服装の習慣においても、食事においても [Şirvani 1: II. 135]

さて、以上から推定されるシルヴァーニーの地理認識を模式化したものが、図2である。彼は、イランとカフカース、あるいはイランとロシアの両方に帰属意識を有していた。このことは、ティフリスで発行されていたテュルク語新聞である『光 *Ziyā*』に寄稿された以下の詩に、よく表れている。

おお、その歡喜がカフカースに喜びを与える者よ

最新の情報は、どれもお前のもとにある

その「光」がイランを照らした [Şirvani 1: II. 64]

ここで注意しなくてはならないのは、シルヴァーニーの地理認識においては、シルヴァーニ地方が直接イランに属しており、南東コーカサス、あるいは「アゼルバイジャン」に該当する地理認識はないという点である。同様に『種蒔く人』に見られる地理認識も、あくまで「我らのカフカース」であった。同誌において、「アゼルバイジャン」は、アーザルバーイジャン地方を指すものとしてのみ現れる [e.g. Əkinçi: 221, 330, 428]。この時代の南東コーカサスの住民にとって、「アゼルバイジャン」は「ふるさと」の感覚に結び付く地名ではなかったのである。

ところで、『種蒔く人』に現れる「カフカース」の用例を1つ1つ検討していくと、この言葉が多くの場合、南コーカサス（ザカフカース）のみを指して使われているということに気が付く。例えば、『種蒔く人』第1巻第2号（1875年8月5日付）に「我らのカフカース」における各都市の税収に関する記事があり、そこでは全部で11の都市が列挙されている。それらのうち、バクー、エリザヴェトポリ（ギャンジャ）、グバ、ナフチヴァンは現ア

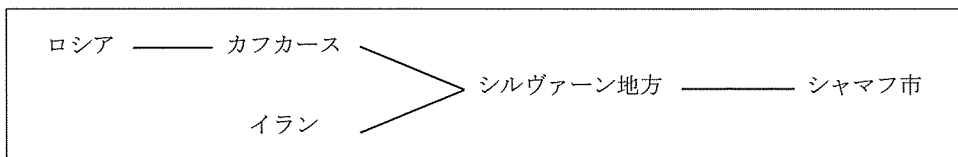


図2 セイイト・エズィーム・シルヴァーニーの地理認識

ゼルバイジャン共和国領、ティフリス、ポティ（Поти）、アハルツィヘ（Ахалцихе）、クタイシ（Кутаиси）、スフミ（Сухум）は現ジョージア領、アレクサンドロポリ（ギュムリ）（Александрополь, Гюмри）、エレヴァン（Ереван）は現アルメニア共和国領である。このように、ここで挙げられている全ての都市が南コーカサスの都市である [Əkinçi: 38]。『種蒔く人』執筆陣は、「カフカース」という言葉を「ザカフカース」の意味で使っていたのである。

また、シルヴァーニーの作品では、ティフリスやガラバグ、シュシャといった地名もそれなりの頻度で登場し、賞賛されている [e. g. Şirvani I: I. 342, 347, II. 44, 57]。「ふるさと」の名として「カフカース」を用いた彼であるが、実際の帰属意識は「ザカフカース」のみに向けられていたらしい。それは、以下に引用するゼルダービーに宛てた韻文の手紙によく表れている。

デルベントも、グバも、シルヴァーンも
 ギャンジャも、バクーも、サリヤーン（Salyan）も
 ランキャラーンの町も、シュシャの地も
 ロシアの政府には、敵対しなかった
 ティフリス、ナフチヴァン、エレヴァンの住民も
 つまりは [ロシアの] 命令に服したのだ [Şirvani: II. 126]

以上の点から、『種蒔く人』周辺の知識人の用いる「カフカース」は、実際には南コーカサス（ザカフカース）を意味する言葉である、ということが確認された。そして、前稿で既に指摘したように、この言葉の登場によって南東コーカサスの住民は、初めて自分たちを単一の集団として表現できるようになったのである [塩野崎 2015: 45-46]。

む す び

本稿では、ゼルダービーやシルヴァーニーら『種蒔く人』周辺の知識人たちの言説を分析することで、1875年前後の南東コーカサスにおける帰属意識のあり方が明らかにされた。最初に指摘できるのは、帰属意識としての「カフカース」の普及である。「我らのカフカース」という表現が頻出することからも分かるように、「カフカース」は、彼らにとっての「ふるさと」となっていた。

また、彼らの言う「カフカース」とは、実際にはザカフカース、すなわち南コーカサスを指すものとして用いられたことも確認された。彼らは、この「カフカース」を間に挟んで帝政ロシアに対する忠誠心を抱いていたが、同時にイランに対する帰属意識もある程度有していた。この帰属意識の二重性も、この時代の南東コーカサスの知識人に共通する特徴の1つである。

そして、この「カフカース」という地方に対する帰属意識を土台に、「カフカースのムス

リム」という集団に対する帰属意識が形成されたのである。また、『種蒔く人』の関係者たちがことさら「ムスリム」という語を用いた背景には、スンナ派・シーア派という宗派の区別を超えるという意図があった。筆者は前稿において、サファヴィー朝時代に生じたシーア派化をアゼルバイジャン民族形成史の画期とする従来の説が誤りである可能性を指摘したが、本稿の結論によってその可能性は高まったと言えるだろう〔塩野崎 2015: 57〕。少なくともゼルダービーやシルヴァーニーといった「カフカースのムスリム」たちは、「シーア派」が自分たちの集団の特徴であるとは考えていなかったのである。

むしろ「カフカースのムスリム」は、南コーカサスに居住する他の諸民族、すなわちグルジア人、アルメニア人、ロシア人との対比という側面が強い言葉であった。「カフカースのムスリム」の呼称には、キリスト教徒の諸民族とは異なる、という自己認識が明確に表れている。そうであるから、彼らは例えば「カフカースのトルコ人」や「カフカースのタタール人」ではなく、「カフカースのムスリム」を自分たちの「民族」の名として選択したのであろう。

そして、この「カフカースのムスリム」が原型となって、後に「アゼルバイジャン人」という民族意識が形成されることは、既に述べた通りである。このことは、現代まで続くアゼルバイジャン人のアルメニア人——南コーカサスにおける代表的なキリスト教徒の民族である——に対する反目の、1つの根本的な要因と言えるのではないだろうか。

参考文献

- APA: *Azərbaycan publisistikası antologiyası*. Cəlal Bəydili (red.), Bakı, 2007.
- Əkinçi: *Əkinçi: 1875–1877 (tam mətni)*. Turan Həsənzadə (red.), Bakı, 2005.
- Şirvani 1: *Seyid Əzim Şirvani: seçilmiş əsərləri*. 3 cildə. Süleyman Rüstəmov (red.), Bakı, 2005.
- Şirvani 2: *Seyid Əzim Şirvani: seçilmiş əsərləri*. Xəlil Yusifli (red.), Bakı, 2007.
- Zərdabi: *Həsən bəy Zərdabi və “Əkinçi”: bioqrafik məqalələr, məktublar, xatirələr, tədqiqatlar*. Musa Yaqub və s. (red.), Bakı, 2010.
- Altstadt, Audrey L. (1992) *The Azerbaijan Turks: Power and Identity under Russian Rule*. Stanford.
- Aşırılı, Akif (2009) *Azərbaycan mətbuatı tarixi*. 1-ci hissə: 1875–1920. Bakı.
- Балаев, Айдын (2005) *Этноыльковие процессы в Азербайджане в XVIII–XX вв.*. Баку.
- İSTİİ (İctimai-Siyasi Tədqiqatlar İnformasiya İnstitutu, Azərbaycan Respublikası Elmlər Akademiyası) (1993) *Azərbaycan dövrü mətbuatı (1875–1990): bibliografiya (ərəb əlifbası ilə, saxlanılmış nüsxələr əsasında)*. Bakı.
- 川端香男里ほか監修 (2004) 『新版 ロシアを知る事典』平凡社.
- Mahmudov, Yaqub (red.) (2004) *Azərbaycan Xalq Cümhuriyyəti ensiklopediyası*. 1-ci cild. Bakı.
- Mahmudov, Yaqub (red.) (2005) *Azərbaycan Xalq Cümhuriyyəti ensiklopediyası*. 2-ci cild. Bakı.

- Mahmudov, Yaqub (2008) *Azərbaycanlılar : etnik-siyasi tarixə ümumi baxış*. Bakı.
- Məmmədli, Hüseynqulu (2005) *Qafqazda islam və şeyxülislamlar*. Bakı.
- Məmmədov, Zakir (2006) *Azərbaycan fəlsəfi tarixi*. Bakı.
- Мильтман, А. Ш. (1966) *Политический строй Азербайджана в XIX-начале XX в. : административный аппарат суд, форму и методу колониального управления*. Баку.
- Mostashari, Firouzeh (2006) *On the Religious Frontier : Tsarist Russia and Islam in the Caucasus*. London.
- Qeybullayev, Qiyasəddin (1994) *Azərbaycan türklərinin təşəkkülü tarixindən*. Bakı.
- Quliyeva, Nərgiz (2011) *XIX-XX əsrlərdə Bakı şəhər əhalisinin ailə və ailə məişəti*. Bakı.
- Şahverdiyev, Akif (2006) *Azərbaycan mətbuatı tarixi : ali məktəb tələbələri üçün dərslik*. Bakı.
- 塩野崎信也 (2010) 東コーカサス地方史『エラムの薔薇園』にみる歴史認識と地理認識『西南アジア研究』73, 71-100.
- 塩野崎信也 (2015) 「タタール」から「アゼルバイジャン」へ『オリエント』57-2, 41-62.
- Swietochowski, Tadeusz (1985) *Russian Azerbaijan, 1905-1920 : the Shaping of National Identity in a Muslim Community*. 1st paperback edition, Cambridge, 2004.
- Swietochowski, Tadeusz (1995) *Russia and Azerbaijan : a Borderland in Transition*. New York.
- 高田和夫 (2012) 『ロシア帝国論——19世紀ロシアの国家・民族・歴史』平凡社.
- 上野雅由樹 (2010) ミット制研究とオスマン帝国下の非ムスリム共同体『史学雑誌』119-11, 64-81.
- Xəlilli, Xəliləddin (2007) *Azərbaycan türklərinin etnogenezi və milli inkişaf tarixi*. Bakı.
- Zeynalzadə, Ağarəfi (2006) *Azərbaycan mətbuatı və çar senzurası : 1850-1905*. Bakı.

(日本学術振興会/関西学院大学文学部)